

IV-24

都市における核心（コア）の構造に関する景観工学的研究

岩手大学工学部 正会員 安藤 昭
 岩手大学工学部 正会員 赤谷 隆一
 岩手大学工学部 ○学生員 長谷川順一

1. はじめに

ヨーロッパの都市は広場を核心(コア)として構成されているのに対し、日本の都市には核心がなく、無秩序な市街地をなしているといわれる。しかし、本当にそうであろうか。本研究は日本の都市の核心は何か、そしてその構造はどのようなになっているかを明らかにすることを目的としている。

2. 都市における核心的景観の分析モデル

ここでは、都市における核心的景観の構造について次のような視点、すなわち人間集団（評価主体）と都市（景観対象）との間の視知覚的な関係性としてとらえ、人間集団（コミュニティ—プライバシー）と都市の視知覚的環境（空間—景観）の2つの尺度を交差させると、都市における核心的景観の構造を描きだすことができる。（図-1）

さて図-1に示されるところのインフラ機能空間、心理現象としての景観、文化現象としての景観、そして生物的環境の4つのタイプの都市景観が美的形式原理にもとづいたひとつの景観として、つまりバランスよく形式的に統一された眺め（scene）として与えられると、空間・景観のありように“主体の仮想の参加を通じて”豊かで確かな意味の脈絡が生じ、景観の深さと密度を高める。この景観のうち評価がもっとも高い景観（都市のなかの第一位の評価の景観）を都市の核心的景観と呼ぶことにする。核心的景観には、上述の視点固定的なシーン景観の他に視点非固定の街路や広場も含まれる。

図-1の分析枠組みによって示されるように都市の核心的景観は、歴史的積層、地理的構造、人間の社会生活にかかわる機能的条件、生物的環境のもっている安らぎ感、地域地区により多様でパーソナルな雰囲気をもたらす、したがって日常の体験に個人的奥行をもたらす景観のすべての景観に密接なかわりがあることがわかる。

3. 調査地域および調査の方法

調査地域は、東北・北海道の個性豊かな7都市である。調査方法は現地踏査および郵送によって各都市計画課に都市の核心をなすと考えられる眺望・街路・広場を選定してもらうという方法で行なった。（表-1）このうち函館山からの市街地の眺望（函館市）、飯盛山からの若松城址（鶴が城）および市街地の眺望（会津若松市）、武家屋敷通り（角館町）、元町公園（函館市）をとりあげ、分析してみると次のようになる。

4. 検証分析

4-1 シーン（scene）景観の実例の分析

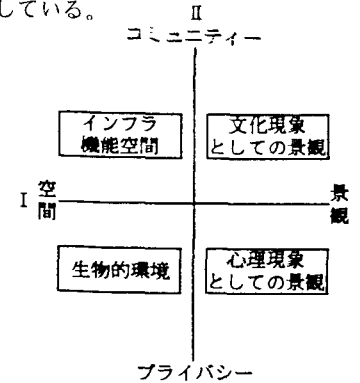


図-1 都市の核心的景観の分析モデル

表-1 各都市の都市計画課から寄せられた景観

都市名	場所
函館市	① 函館山→市街地
	② 函館港→函館山一帯
	③ 五稜郭タワー→市街地
弘前市	① 弘前公園→岩木山
遠野市	② 市街地→最勝院五重塔
平泉町	① 鶴が城址→市街地
仙台市	① 高館→北上川・市街地
	① 仙台城址→市街地
	② 太白山→市街地
会津若松市	③ 都市部→青葉山
	① 飯盛山→市街地
函館市	② 背あぶり山→市街地
	① 港カ丘通り
	② 大三坂通り
	③ 八幡坂通り
	④ 基坂通り
弘前市	⑤ 行啓通り
遠野市	① 弘前公園外周道路
角館町	② 大工町通り
仙台市	③ 武家屋敷通り
	① 青葉通り
	② 定禅寺通り
会津若松市	③ 東二番丁通り
函館市	① かぎがたの道路
遠野市	① 元町公園
平泉町	① 市民センター前
仙台市	② 遠野駅前
会津若松市	① 無量光院跡
	② 勾当台公園
	① 若松城本丸

a) 函館山からの市街地の眺望

函館市は、渡島半島南端に位置した人口31万人の南北海道の中核都市で、函館山は西部地区に位置する山である。函館山からの景色は生物的環境(函館山, 函館港, 大森浜, 駒ヶ岳連山)で囲まれた市街地(機能空間)、街並みの中の五稜郭や点在する歴史的建造物(文化現象としての景観)で構成されている。函館山から市街地まではかなり落ち込み俯角の大きい領域が開放される。港と市街をがかえこんだこの眺望が“100万ドルの夜景”と呼ばれる日本の代表的な風景にさせたものと思われる。

函館山(視距100~600m:近景領域), 駒ヶ岳連山(視距30km~:遠景領域), 函館港・大森浜(視距1.2~4.5km:中景・遠景領域), 市街地(視距1~10km:中景・遠景領域), 五稜郭(視距5.8km:遠景領域), 点在する歴史的建造物(視距800m~1.6km:中景領域)

b) 飯盛山からの若松城址(鶴ヶ城)・市街の眺望

会津若松市は会津盆地東端部に位置し、市全体の70%が山に囲まれた人口28万人の会津地方の拠点都市である。飯盛山は市東部にあり、市街地を一望できる。ここからの眺めは生物的環境・文化現象としての景観の飯盛山の樹々を前景に街並み(機能空間)が若松城(文化現象としての景観)を中心として統一されている。飯盛山からの眺めは角度を変えてみた明治維新の歴史の姿があり、おのずと新たな感動があふれてくる。

飯盛山(視距100~500m:近景領域), 市街地(視距100m~4.5km:近景・遠景領域), 若松城(視距2.8km:中景領域)

4-2 街路の実例の分析

a) 武家屋敷通り

武家屋敷通りは表町上丁から東勝桑丁までをさし、武家屋敷(文化現象としての景観)の老木(生物的環境)と旧藩時代の環境を残した街並み(機能空間)の調和が人々を安らぎの中に引き込む。

街路延長 $L \approx 810\text{m}$, 街路幅員 11m , 歩道幅員 $D_s \approx 1.5\text{m}$, 沿道の建物の高さ $H \approx 3 \sim 6\text{m}$ (1~2階)の街路であるので、街路幅員延長比 $D/L \approx 1/74$, 歩道幅員比 $D_s/D \approx 1/7$, 街路幅員建物高比 $D/H \approx 1.8 \sim 2.9$ のプロポーションからなる街路である。

4-3 広場の実例の分析

a) 元町公園

元町公園は函館市を代表する公園で、広場のまわりの旧函館公会堂、旧イギリス領事館(文化現象としての景観)や基坂を通して見える市街地(機能空間)、函館山や函館港(生物的環境)によって独特の異国情緒を生みだしているといえる。しかし函館山からの市街地の眺望が函館市のなかでもっとも評価の高い景観(都市のなかの第一位の評価の景観)であるためこの広場は単なる広場に位置しているといえる。

奥行 $L' \approx 120\text{m} \sim 129\text{m}$, 幅員 $D' \approx 75 \sim 87.5\text{m}$, 広場のまわりの建物の高さ $H \approx 6\text{m} \sim 17.2\text{m}$ (2階~旧函館公会堂)であるから、広場奥行建物高比 $L'/H \approx 6.98 \sim 21.46$, 広場幅員建物高比 $D'/H \approx 4.36 \sim 14.58$ の心地よい囲繞感のある広场景観をなしている。

4. むすび

都市計画課からの回答では眺望14, 街路12, 広場5が寄せられたが、分析の結果、都市の核心をなす景観は眺望6, 街路1, 広場0となり眺望景観が全体の85.7%を占めた。これより日本における都市の核心は眺望景観によって形成されているといえる。日本においては眺望が都市の核心をなすため、ヨーロッパの都市にみられるごとく広場が都市の核心として成長しなかったといえよう。

5. あとがき

都市の人間化の大切さが叫ばれるようになって久しい。この間、多彩な研究と提案がなされてきたが、カミロ・ジッテのその著「都市をつくる術」を祖とする多くは空間論的提案であった。これに対し本研究は都市の核心(コア)ともなるべき景観を定義し、この景観の意味と形態を浮き彫りにすることを目的とする意味論的研究である。

【参考文献】 1)土木工学ハンドブック I, 土木学会・編, 技報堂出版, pp. 841~842, 1989